瑠璃色の時間

香咲弥須子

瑠璃色の時間

江苏工业学院图书馆
藏书章

香咲弥須子

角川書店

瑠璃色(るりいろ)の時間

香咲弥須子

1990年7月30日　初版発行

発行者／角川春樹
発行所／株式会社角川書店
東京都千代田区富士見2-13　〒102　振替　東京3-195208
TEL　営業03-817-8521　編集03-817-8451

印刷・製本／大日本印刷株式会社

Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取替えいたします
ISBN4-04-872589-0　C0093

目次

窓際のテーブル　5
フレームの中のFANCY　39
薔薇(ばら)が笑っている　77
万紀子(まきこ)　115
ルイス・キャロルの小説のように　147
瑠璃色(るりいろ)の時間　177

装丁　坂川栄治

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

瑠璃色の時間

窓際のテーブル

1

空耳かと思って耳をすませると、そうではなかった。雲に覆われた穏やかな光の中、乾いた空気のかすかな流れに乗って、蟬の鳴き声が聞こえてくる。

あたりを見回すが、声のする方角はよくわからなかった。

郁子(いくこ)はしかたなく仰向いて曇った空を見上げ、時季外れの声をしっかりと聞き届けようとする。声を震わせ、響かせる夏の湿った空気はとっくに姿を消しているのに、それでも鳴かずにいられ

ないその最後の声を、せめて誰かが聞いてやらなくてはならない気がした。
公平(こうへい)は、丸いテーブルを斜めに持ち上げてエレベーターの中に押し込もうとしている。だが、テーブルの幅に対して、そのエレベーターはいかにも狭いようだった。
「無理だね」
公平は、ついにテーブルを地面に置いて深い息を吐いた。
髪を短く刈っているので陽に灼けた首筋が剝き出しになっている。その頑丈な筋肉が、彼の息遣いに合わせて動くのを見つけた途端、郁子は蟬の声を忘れた。
見てしまえばまた気持ちが揺らぐとわかっているのだが、視線は意志に逆らって彼の顔の輪郭をたどっていく。
広く平らな額。形よくそがれた鼻筋。骨張って鋭角的な顎のライン。張りのある肌に比べて、乾いて少し荒れているように見える色彩の薄い口もと。
たった今、もしわたしが触れてみたい、唇を寄せてみたいということを言ったとしたら、公平はきっと受け入れてくれるに違いない。そんな確信が息をつまらせる。
この期に及んで、と郁子は思いを振り払い、ようやく視線を引き剝した。
離婚した姉から譲り受けたテーブル。
新婚家具のひとつとしてわざわざオーダーで作らせたという白木のテーブルを、郁子は大切に

していた。汚れがしみ込むたびに表面を削り、ニスを塗り直していたので、艶やかに光っている。
郁子はエレベーターのボタンから指を離した。オリーブ色のドアはぎこちない音をたててゆっくりと閉まる。
「七階、だったよね？」
公平が、エレベーターのすぐ脇から奥へ伸びる階段を見上げながら言った。
郁子の荷物を運ぶためにすでに何度も往復したあとだったから、郁子は彼のひとり言のような問いに答えるかわりに、これで最後だから、と詫びるように言った。
公平は振り向き、笑いかける。
瞳をいっぱいに見開いて唇をきつく結んだ、見慣れた表情。郁子は、彼がどんな時にこんな顔を見せるのか、よく知っていた。
たとえばピーター・トッシュの訃報を聞いた日。あるいはずっと以前に遡って、ジョン・レノンが撃たれたというニュースが届いた日。公平は、映画館などでは涙もろい男なのだが、ショックや悲しみが身体の奥まで突き抜けるような時には決して泣くことがなかった。
郁子はふいに、今まで忘れていた公平の言葉を思い出す。
真剣に望みさえすれば何でも手に入るものさと言ったのはジミー・クリフ。欲しいものがいつでも手に入るとは限らないと歌ったのはストーンズだ。レゲエとロックの違いを端的に表わして

いると思わないか？

でも、と郁子は考える。わたしならこう言ってみたい。

もし本当に望んでいるのなら、望んだ瞬間に欲しいものはすでに手に入っているのではないか、と。

「そんな顔するなよ」

素早く伸びてきた公平の右手を、郁子は身体をかたくして受け止める。

やっぱり手伝ってもらうべきじゃなかったんだ。

郁子がここからひとりで出ていくなんて耐えられないよ。手伝わせてくれ、と言い続けたのは公平のほうだった。でも、自分の一方的な意志で男と一緒に暮らしていた部屋から出ていくのに、その当の男に引越しを手伝わせるなんてずいぶん勝手な話ではないか。

「ごめんなさい」

数え切れないほど繰り返してきた言葉が、またこぼれ出た。

すっかり口癖になってしまったようで、いったい何に対して謝っているのか正直なところ自分でもよくわからない。だが、公平の右手の温かさに一瞬にして反応してしまう全身の感覚と、身を引いて逃げたい気持ち、その両方を伝えるのにほかの言葉はどうしても見当たらなかった。

「わたしも一緒に運ぶから」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

公平がなかなか手を離そうとしないので、郁子は声が震えないよう、気をつけながら言ってみる。

「かついでしまったほうが楽みたいだ」

不自然なほど明るく乾いた声で公平が言い、右手をテーブルに戻したので、郁子もほっとして狭い空間を眺める。

非常用の階段だからだろう。アパートのほかの部分は古びてあちこちに汚れが目立つのだが、この空間だけは建てられた当時のままの清潔さを保っているようだった。ほの暗いのに、えんじ色のフロアとクリーム色の壁が光沢を保ち、まぶしいほど鮮やかに目に映る。空気は静止しているようで、しかし淀んだ感じはしない。あの壁は、きっと手のひらに冷たいだろう、などと考えてみる。

「一気に行こうか」

公平が腕を広げ、テーブルを逆さにして持ち上げる。脚のひとつに頬を押しつけて安定させると、ゆっくりと階段を昇り始めた。思いのほか軽々と見えたが、彼の二の腕の筋肉は、なめらかな肌の下で思いきりよく突き出していた。

後について昇りながら、壁に手を触れてみる。思ったとおり冷たかった。

祖父が亡くなった時のこと。郁子は棺の中で目を閉じている祖父の額に手を伸ばし、その冷え

きった肌に息をのんだ。まだ中学生だったが、その感触はずっと忘れていない。そしてその時考えたことも。

氷よりも冷たいんだ、とまず思ったのだった。それから、いつかはこうして死ぬのだから、思いどおりの人生にしなくっては、と。もちろんその時頭に浮かんだ「人生」という言葉は、大人の世界に対する単純な憧れの言葉に過ぎなかったのだけれども。

目の前で、小ぶりの腰がリズミカルに動いている。はき古したブルー・ジーンズは色褪せ、ポケットのひとつにはいつも財布を入れているせいで、四角く白く跡が残っている。もう一方のポケットには、初めは郁子のもので、いつのまにか公平が使うようになったバンダナ・サイズの赤いハンカチが覗(のぞ)いていた。

アパートを出るにあたって公平のもとに置いてきたのはハンカチだけではない。テーブルや椅子、組み立て式のシングル・ベッドなどと一緒に郁子が持ち出したのは、さしあたって必要なものだけで、ダンボール六個に納まってしまった。

ほとんどが衣類、そして一箱にはノートが詰まっている。高校の頃から日記がわりにいろいろな想いを詩や文章にして書き綴ってきたものだ。これだけは公平にも隠し続けてきた十数冊のバインダー・ノートだった。

ダンボールにガムテープを巻き終わり、これで全部、と言った時、公平は、例の目を見開いた

表情をして、せめてこれだけでも持っていってくれと、携帯用のCDプレイヤーを出してきた。
本当は、未練のあるものはいくらでもあった。とりわけ本やレコードの類に。だがお互いの持ち物をひとつずつ分け合うのは気がすすまなかった。だから要らないと言っているのに、公平は小さなスピーカーも出してきて、好きなCDを選んでいけときかなかった。
郁子が買ってきたヤツで、僕なんかが絶対聴かないのってあるからさ。
薄いベージュのカーペットを敷きつめた部屋の真ん中で胡座をかき、郁子の目を覗き込むように見つめた公平の顔。クーラーから吐き出された微風が短い髪をわずかに揺らしていた。彼の背後のボックスの上には、本や雑誌、クッキーの缶などが雑然と積まれており、コーヒーが注がれたマグ・カップは、手をつけられないまま二つ並んでカーペットの上に置かれていた。
郁子はきっちりと正座して、公平が壁に寄せて積み上げられたCDから慎重な手つきで何枚かを選び出すのを黙って眺めるほかなかった。
二年と三か月、二人で暮らしていた間、いつも一緒に音楽を聴いていた。ただそう思っていたいのに、わたしの気持ちの奥底を暴き出すように、公平は、わざわざ二人の好みの違いをはっきり目の前に差し出そうとしている、という気がした。
「ストーンズはどうしようか」
背を向けたまま、公平が言った。

「お互いに、あとで買い足せばいいことだから……半分ずつ分けるか。はなむけだ」
五階か六階まで通過したはずだ。フロアの途中の踊り場で公平の腰の動きが止まった。
「ひと休み」
少し、息が切れていた。そのせいか、彼のまっすぐな声はいっそう大きく歯切れよく響く。
踊り場の壁には、窓が切り取られている。一メートル四方ほどのほぼ正方形の窓で、その形が奇妙にその存在を強調していた。ぼんやりとした光が分厚い素通しガラスを通して入り込み、周囲の壁の艶やかさを増している。
公平がテーブルをまわり込んで窓に近づいた。郁子も彼の肩越しに、窓の外を眺める。
近くに視界を遮るような高い建物がないので、さまざまなものが見渡せた。すぐ脇を走る片側二車線の道路は、まっすぐに高層ビルの群れの中に伸びている。ビルの細かく並んだ窓のほとんどは、午後になったばかりだというのに蛍光灯をともして白く光っている。東京タワーが霞んで見える。そのさらに向こうの複雑な形をした建物は、半年ほど前にできたばかりのコンサート・ホールだ。来日ミュージシャンによる柿落(こけらお)とし。それが公平と観る最後のライヴになった。
郁子は、サイズの大きいスウェット・シャツの中で小さく身体を動かしてみた。中にこもる空気とスウェットの裏地がさらさらと肌の上を滑る。だがそれは心地よいというよりも、なにやらそっけなく心もとないばかりだった。

「東京タワーか。夜になったらきれいだろうな」
公平の声につい誘われて、サッシの窓枠に手を伸ばし、窓を押し開ける。
「いい風だ」
公平が、窓から顔を突き出し、言った。
「いいところだな、ここ。まわりに樹も多くて」
郁子も並んで窓際に立ち、下を覗き込む。
真下には、いくつかの種類の樹木が葉を茂らせており、その間に背の低い住宅のさまざまな色にペイントされたスレート屋根が見える。複雑に曲がりくねった路地が見え隠れしている。
「迷ったのはどのへんかな」
公平が、路地を指さし、先ほど近道をしようとして結局方向を見失ってしまった場所を探している。
誰にも相談せずに不動産屋に足を運んで見つけた一年契約のアパートだった。予算内で、今まで住んでいたところから離れていればどこでもいいという条件で探したものだ。この見慣れない風景を、今、こうして一緒に眺めてくれている公平に対して、何か言わなければ、という思いがせり上がってくる。でもなんて言ったらいい？　ごめんね。それとも、ありがとう、とでも？
「ねえ」

郁子は窓枠に胸を寄りかからせ、頭を揺らして頬にかかる髪を振り払った。
「わたし、ちゃんとやっていけるかな」
何も聞こえない。ゴォーッという街の底から湧き上がるような響きがかすかに耳に届くだけだ。
「まじめにやりさえすればね」
窓から見下ろしたまま、公平は言った。
「でも、たいへんだぞ」
わたしも何か仕事したい。初めてそう言った時、公平はただ笑うだけだった。
今だってちゃんと仕事して稼いでるじゃないか。
わたしがしたいのはあんなことじゃないよ。
一年前の夏、公平は、冷えたコーラの瓶を片手に隣の仕事部屋に入ってしまった。
僕と張り合おうなんて思ってるんなら止めたほうがいいぞ。こんな業界に入るくらいなら、社長秘書のほうがよっぽどいいさ。
従業員が三十人に満たない会社でも、一応肩書きは社長秘書だ。社長といってもまだ四十歳に手の届かない独身の男の雑事をこなすことが郁子の仕事だった。
あの退屈な時間から逃れるためだったら、どんなことでもいい、何か手ごたえのあることをやってみたかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com